

卒前卒後の一体養成策を 厚労省・安川薬事企画官

厚生労働省医薬・生活衛生局の安川孝志薬事企画官は、薬事日報のインタビューに対し、「薬剤師の養成および資質向上等に関する検討会」での取りまとめを受け、卒前と卒後を一体化した薬剤師養成策を検討すべきとの考えを示した。文部科学省が薬学教育、厚労省が卒後教育を所管しているが、「文科省と厚労省がもっと協力していくことが重要」とし、両方で研修プログラムや実施体制などのあり方を検討していくことを今後の課題に挙げた。

厚労省は、およそ1年かけて薬剤師に関する需給、養成、資質向上の今後のあり方について議論を行った。薬剤師の需給調査では「将来的には業務の充実により需要が増える」と仮定しても、供給数が需要を上回る」とし、薬剤師が供給過剰になることが示された。

安川氏は、「薬剤師の供給が過剰になるという問題を別にしても、学生が減るのに学生の質を確保できるのかという質の懸念については、議論していかなければいけない」と指摘した上で、文科省が薬学教育、厚労省が卒後教育と卒前・卒後で管轄省庁が分かれる薬剤師養成のあり方に言及。

「厚労省は薬剤師免許の取得後にどういうキャリアパスを描いていくかを考えていくべき立場」としながらも、「薬剤師養成を議論のテーマにすると、卒前でのプロセスも必ず話題になるので、薬学教育とセットで議論しないといけない。卒前・卒後を一体化し、教育から免許取得、そしてその後のキャリアパスを考えないと議論が錯綜してしまう」と述べ、薬剤師養成で文科省と厚労省の連携強化を訴えた。

ニュースダイジェスト

「薬事日報」の紙面から

薬学教育については、2022年度には薬学教育モデル・コアカリキュラムの改訂を予定しているが、検討会の取りまとめでも▽今後の実務実習のあり方を検討する▽臨床現場の実態を学習できる内容にする▽薬科大が他の医療系学部を持つ大学と連携する——ことなどが提言された。

ただ、卒後研修は、免許取得直後の薬剤師を対象とした研修を実施している医療機関がある一方で、法制化されていない。検討会でも医師の臨床研修のように広く実施すべきとの意見も出た。

安川氏は、「卒前の実習をどう充実させるかを考え、そこでやりきれない部分を免許取得後の実習で対応

していく。実務実習の段階で対応可能な部分は、卒後で対応しなくても十分という議論があってもいい」とし、卒前の実務実習との関係性を踏まえ、卒後研修のあり方を検討すべきとの考えを示す。

一方、薬剤師の地域偏在をめぐる問題については、「都道府県ごとに需給推計した時には、人口減少が大きい地域とそうでない地域で薬剤師需要の変動要因に差が出てくる。都道府県単位で薬剤師確保や医薬品提供をどう考えていくかがこれからの課題」と指摘。各地域で薬剤師の充足状況や需要度を把握し、今後の対応策を検討すべきとした。

(2021年7月9日掲載)

先進諸国において、ポリファーマシーと呼ばれるような状態の人は増加傾向にあることが知られています(PMID: 30540223)。そのような中で、薬の潜在的な有害事象に関心が向けられるようになったことは、皆さんもご存じだと思います。

薬がたくさん処方されていることは、健康状態にとって好ましくない出来事のいくつかに関連していることは確かです。しかし、数多くの薬が処方されている人は、そもそも薬に対応するだけの健康問題を有しており、ポリファーマシーではない人と比べて、もともと健康状態が良くないと考えられるでしょう。つまり、ポリファーマシーは健康状態の悪化がもたらした帰結に他ならず、その直接的な健康への影響(因果関係)を見積もることは困難と言わざるを得ません。

先日、ポリファーマシーに対する減薬介入について、総説論文を共著で執筆し



医療法人徳仁会中野病院薬局
青島周一

これから『薬』の話をしよう

ポリファーマシーに対する減薬介入と課題

ました(PMID: 34221792)。140件の論文を引用して明らかになったのは、どのようなアプローチが適切な減薬介入なのか、明確には分かっていないことでした。ポリファーマシーの害だけでなく、減薬介入がもたらし得る健康への影響についても、僕らが想像するよりはるかに小さい可能性が浮き彫りになったのです。

減薬介入の効果が明確ではない理由を考えてみましょう。まずは、薬を1剤や2剤ほど減らしたところで、健康状態に与える影響はほとんどないのかもしれませんが、加えて、慢性疾患用薬の多くはその服薬アドヒアランスが50%程度と、決して良好ではありません(PMID: 22748400)。もともと服薬できていないのであれば、いくら処方薬剤数を減ら

したところで、患者さんの健康状態になんら影響を与えませんか。

また、薬の適正使用や潜在的なリスクについて、教育的介入の効果を検討した研究も数多くありました。ただ、このような教育を受けることによって人の考え方や行動に変化が起きたとしても、それが健康状態に良い影響を与えるかどうかは別問題なのでしょう。

こうした解析結果から「減薬介入にはあまり意味がないから無駄である」と結論づけることは容易です。しかし、明らかに不適切と思える処方を見かけることもまた事実です。減薬介入によって恩恵を受けることができるような患者背景や介入手法の特定こそが、今後の大きな課題と言えるかもしれませんね。

“患者”と“医療者”による本当のチーム医療とは!?



A5判/104頁/定価1,800円+税



【編著者】岩堀 禎廣

【著者】鈴木 信行
有田 悦子

【目次】

第1章 患者参加型医療とは？
第2章 なぜ、患者は薬を飲まないのか？
第3章 患者視点のない医療者は生き延びれない

第4章 患者の想いを共有するために
～薬剤師と患者のコミュニケーション～
第5章 最初の一步は薬剤師から！

医療のこれからのあるべき姿である「患者参加型医療」。その考え方を広め、実現するために、患者と医療者双方の立場から“わかりやすさ”をコンセプトに概念や課題などを詳述した一冊。

薬事日報社 書籍のご注文は、オンラインショップ(<https://yakuji-shop.jp/>)または、書籍注文FAX03-3866-8408まで。